

初期・部派仏教における信の再考

— 四ニカーヤとその注釈書における信の位置づけを中心として —

新田智通（大谷大学）

初期仏教・部派仏教における「信」について論じた研究は数多くあるが、それらを見ていくと、信の位置づけが研究者の間で必ずしも一致していないことに気付かされる。

そもそも、一般的に言って「信」という概念は、「何かを」信じるという対象性を前提としており、信じる主体と信じられる客体との間の、何らかの隔たりを示唆している。そうした観点からすると、例えば『ダンマパダ』において、正しい智慧によって解脱した人は「信をもたない」と言われているように、もしある人が、上述のような対象性も解消され知るべきことそのものとなるような完全な知を成就するならば、その人にはもはや信はないということになるであろう。逆に言えば、信を抱いている人の知はまだ不完全であり、その後の修行を通して、自らの知を深めていかななくてはならないのである。『大智度論』の有名な「仏法の大海は信を能入と為し智を能度と為す」という言葉もまた、そうした信と知の関係から言われているように思われる。

ところが、仏教における信は知的理解をまったく伴わないものかということ、そうではない。むしろ、これまでの研究を紐解くと、非常に多くの研究者が、仏教の信は根拠を欠いた盲信ではないということを強調していることがわかる。つまり正しい信は、何らかの知的理解に裏付けされたものなのである。以上のことを総合すると、確かに『大智度論』で言われているように、人は信から出発して知の完成へと至ると言い得ると同時に、その信が生じるのは、ある種の「目覚め」ともいべき知的理解によっているということになる。

このように、信と知の関係は複雑であり、それゆえ、ただ信を仏道の入り口に位置づけ、その後の知の深まりに応じて信は知に取って代わられるのである、と単純に説明することはできない。そのことは信と実践の関係からも読み取ることができる。というのも、仏典を紐解くと、確かに、信を抱くことで人は実践に身を投じるというように、信が実践の前提条件とされている一方で、実践を通して信が深まるとも言われているからである。そうした信の深まりは、預流向を始めとする修行段階（四向四果）などとの関係でも確認することができる。

本研究は、従来の諸研究を整理しつつ、パーリの四ニカーヤと、それに対する注釈文献を主なテキストとして、パーリ仏教における信の位置づけについて再検討することを目的とする。はじめに、パーリの当該文献における信と知の関係や、信と実践の関係について概観する。そのうえで、預流向などの四向四果と信の関係や、それとともに語られる随信行者・信解脱などについて論じたい。

キーワード：saddhā, Buddhaghosa, 預流。